塵をかく幻夢

雪川桜木（瀛寰企画より）

祇園精舎の鐘の音

祇園精舎の鐘の音

祇園精舎の鐘の音

祇園精舎の鐘の音

元の都市　とある言い伝え

黄粱を煮て　火が小さくて

本を開いて独り読む間に

夢に耽ると　げんせに行ける…

遠い野原に　雪降り紛れ

広い地を全て覆う

春日に落ちる桜のように

をかし　あはれ　つれてゆく

古い写真で見た色褪せた

人混みの街　いきいきな景色

幻と現は紙一重

撫子色滲んだ微風を

おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢の如し

たけき者もつひに滅びぬ

風の前の塵に同じ

娑羅双樹の花の色

娑羅双樹の花の色

娑羅双樹の花の色

娑羅双樹の花の色

新しいまわりに慣れるまま

荘周と胡蝶　どちらであるの

土埃揚げる街に立つ

役割担う　えんぎ探すへ…

暗闇の隅　人なきこみち

名前知らぬ花咲いて

彷徨う心を慰めてる

をかし　あはれ　つれてゆく

古い浮世絵見た厚く塗った

秋の海風　しけるなみだよ

幻と現は一瞬で

撫子色滲んだ五月雨を

おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢の如し

たけき者もつひに滅びぬ

風の前の塵に同じ

儚い情け　やがて散り去る

光と影　目を重ねて踊る

幻と現は紙一重

憂世浮世にて憂きより浮きよう

おごれる人も久しからず

されば夢をぞ心得て書かむ

たけき者もつひに滅びぬ

塵を集へば山ならる